
マテオ・リッチと中国と日本

しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マテオ・リッチと中国と日本

【Nコード】

N8864N

【作者名】

しのぶ

【あらすじ】

中国で宣教したイエズス会士マテオ・リッチの話

（前書き）

ほぼノンフィクションです。小説としてどうかとも思います。

マテオ・リッチは1552年、イタリアのマチエラータ市に生まれた。

当時マチエラータでは、周囲では戦争が起こり、町中では暴力沙汰が日常であった。

リッチが学校に通っていた通りではアラレオーナ家とペツリカーニ家が争っていて、白昼人が刺し殺され、ミサの最中に切り殺される者さえいた。

リッチが三歳の頃にはチミネッラ家の者三人が人を射殺し、五歳の時には、修道士までもが殺人を犯した。

聖職者や町の長老たちは争いをやめさせようと力を尽くしたが、リッチがローマに留学した時でも、まだこうした事件は日常だった。

また一方で、マチエラータのすぐ近くには奇跡によってパレスチナから運ばれたと伝えられる聖堂があつて、リッチはこの聖堂に愛着を持ち、誇りに思っていた。

この頃はいわゆる対抗宗教改革の時代にあたる。

これより前、スペインではスペインを征服していたイスラム勢力が追い出され再征服が完了し、その勢いを駆ってスペインはアメリカ大陸まで征服していた。

また宗教改革でプロテスタントがカトリック教会から独立し、かつて一枚岩だった西方教会は分裂した。

かねてからカトリック教会の内外で、教会の腐敗が糾弾されていたので、プロテスタント側の批判もあり、カトリック側も自己改革と

伝統の擁護を行い、教会の刷新を図った。

こうした動きを対抗改革という。

カトリックとプロテスタントの争いは、しばしばヨーロッパ内の戦闘の原因にもなった。

そんなわけで、当時カトリック側ではカトリックの防衛と、再興、拡大のために熱心に活動が行われていた。

ローマはカトリックの中心地であり、教皇座のある街であり、数々の聖人の記憶の残る街であった。

そのローマで法律を勉強していたリッチは、イエズス会に入ることが志すようになり、実際そうした。

イエズス会はカトリックの修道会の一つで、特にヨーロッパを越えて、世界で宣教した事で有名である。

日本で宣教したフランシスコ・ザビエルもイエズス会士である。

アメリカ大陸では征服と宣教が平行して行われたことはリッチも知っていたが、元々こうした修道会は独立した団体で、国家の命令で動いているわけではない。

修道士含め、聖職者は戦闘も殺傷も禁じられているので、アメリカのように軍の庇護が得られない場合、異教の外国に赴くのは常に危険があった というより修道士になった時点で常に危険があるのだが、リッチはこれを受け入れた。

もとより、聖職者は常に死も困難も覚悟するものだ。

歴代の聖人たちのように・・・

リッチから、イエズス会に入るつもりだと連絡を受けたリッチの父親は反対し、自らリッチを連れ戻そうとローマに向けて旅立った。しかし旅の1日目を終えたところで高熱をだして倒れ、これは神の意志だと思った父はリッチの入会を認めて、故郷に帰った。

リッチはイエズス会の学校で神学や哲学を学び、また数学や科学などの教養も深めた。

リッチはインドに派遣され、そのイエズス会の学校で勉強をしていたが、この時、リッチと同じく聖職者になる勉強をしていたインド人の学生を神学と哲学の講義から排除するという決定が学校でなされた。

彼らに学問を身につけさせると、ヨーロッパ人の聖職者の言うことを聞かなくなるからという理由だった。

リッチは反発して言った。「そんな事をすれば彼らは私達を憎むようになりかねません。」

それでは私達がこのインドで目指している、異教徒を改宗させ、私達の聖なる信仰にとどめるといふ目標を妨げる事になるのではないですか。」

こうした事の後に、リッチは、後に日本と中国の巡察師となるアレックスサンドロ・ヴァリニャーノによって、最近管轄下に入ったばかりの中国に派遣されることになった。

中国への宣教はザビエルも志していたが、入国できないままザビエルはこの世を去っていた。

それで、リッチはマカオに渡り、そこでマカオに住む中国人や中国

の書物などから、中国語と中国文化を学びながら入国許可が降りるのを待っていた。

イエズス会では、「適応主義」という方法を探っていた。

これは、外国でもヨーロッパ流のやり方を通すのではなく、現地の文化や習慣を尊重しつつカトリックの教えと合わせていく方法である。

リッチは、マカオで論語や書経、詩経など儒教の書物を学んだ。

そして儒教の道德に感銘を受け、儒教の教えはキリスト教と基本的に相反しない上に、孔子は来世についてほとんど語らず、専ら地上で正しく生きる事を教えたものだから、キリスト教との共存は可能だと考えるようになった。

後に中国本土に渡って、リッチはこの考えを強めた。

一方、教義上の問題から仏教とは後に対立するようになった。

マカオで中国の研究をしている間、あるヨーロッパ人神父がインドから上長として派遣されてきたが、彼は専らマカオのポルトガル人のみを相手にしており、

中国人を改宗させようという熱意はなく、むしろ中国人の改宗を喜んでいないようにさえ見えた。

彼はマカオの学校で勉強していた中国人キリスト教徒について、自分がこの上長として留まることになれば、あの連中には畑でも耕させておくつもりだと一度ならず言った。

後に彼はインドに送り返されたが、彼のような人間は少なくなかった。

リッチは、講義から外されたインドの神学生のことを思い出した。

リッチは厳しく、彼のような宣教師は、

「学院の暮らしに慣れきって、信者を愛することもできなくなってしまった」

と言い、さらに

「キリスト教の何たるかも理解していない」

とまで言った。

こうした事があったので、リッチは自らが中国に赴いて布教したいと強く願うようになった。

儒教では、武力による「霸道」ではなく、徳による「王道」を提唱している。

アメリカ大陸のように武力によらず、キリスト教的徳によって宣教するのは儒教での王道にあたるものだ。

だから、儒教が尊ばれる中国ではきっと宣教が成功するはずだとリッチは信じた。

リッチがマカオにいる間に、ヴァリニャーノが日本から、ローマへの使節と共にマカオに立ち寄った。

この使節は日本のクリシタン大名の子弟で、伊藤マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンの四名、いわゆる天正少年使節である。

リッチは彼らとも会ったが、中浦ジュリアンは内気そうな人物で、使節の役には不向きに思えた。

ある時、中浦が一人でリッチを訊ねて来て言った。

「神父様は、故郷を離れて遠い異教の国まで宣教に来ることが恐ろ

しくはないのですか？」

リッチ「確かに不安はありますが、これは私の使命ですから」

中浦「そうですか・・・」

リッチ「あなたは、自分のローマへの旅が不安なのですね？」

中浦「そうです。それに、私の国でこの先キリスト教がどうなるのかも」

リッチ「神の至善なることを信頼することです。
たとえどんな困難や試練があろうとも、それを堪え忍ぶなら神があなたに報いてくれるという事を。」

中浦「・・・わかりました。」

やがてヴァリニャーノは使節と共にマカオを発ち、リッチと仲間の神父たちは何度か追放された後、広東省の都市に住むことを許された。

そこでリッチ達が知ったのは、中国人の間には外国人に対して信じがたいほどの敵意があるということだった。広東省の人々は外国人を「外国の悪魔」としか呼ばなかったし、外国人は皆人倫を持たない墮落した獣のような存在で、外国人が中国国内に住んでいれば、それは必ずなにかひどい悪事を企んでいるのであって、災いの元だというのが大抵の見方だった。

こうした見方にも根拠がない訳ではなかった。

実際、フィリピンのマニラでは中国系の住民が暴動を起こすのでは

ないかと恐れた総督が中国系住民を虐殺する事件が起こっていた。
また、西洋人が訪れる以前から問題はあった。

この時代中国は明代だが、明はモンゴル人の元が中国を征服していたのを倒して興った王朝である。

そのため明は国粹主義的な時代だった。

ちょうどスペインのようなものである。

また、明代は北では北方民族の攻撃、南では倭寇に悩まされていた時代でもある。

リッチ達のいた広東省はちょうど外国と海と境を接していて、特に外国人への敵意が強かった。

それに、明は鎖国政策を採っていたので、人々は外国のことなどほとんど知らず、中国が最も優れた国で、何かの点で中国より優れた国があるなどとは信じない、いわゆる中華思想もあった。

リッチ達が住んでいた家のすぐ隣で塔が建てられていた。

近所の人々はリッチ達を追い出そうとしてそこに登ってはリッチ達の家に毎日石を投げたので、家はかなり破損した。

ある日、あまりこれが頻繁なので、家の者が石を投げた少年を捕えて、司法官に訴えると脅した。しかし近所の人々が少年を放してやってくれと頼んだので、リッチは少年を帰した。

ところが、人々は少年の親族を唆して、訴訟を起こさせた。

少年の親族の1人は少年を自分の弟だと言って、外国人が弟を三日間も家に監禁して声が出なくなる薬を飲ませ、マカオに売り飛ばそうとしたと大声で訴えながら通りを練り歩いた。

街の人々もみな口裏を合わせたので、塔の工事監督たちが証言してくれなかったら、リッチ達は棒打ち刑をくらって追放されるところだった。

また、そこから別の地方に移った時には、ある夜家が武装した強盗達に襲われた。

この時リッチは扉をしめようとした手を斧で切られて負傷した。

止められないと悟ったリッチは二階から飛び降りて逃げたが、この時足を挫いて歩けなくなったので、大声で近所に助けを呼んだが、近所の人々は強盗とぐるになっていたので誰も助けに来なかった。

すでにリッチが逃げたと思った強盗達は去っていったが、その後彼らは捕まった。

彼らの中には身分の高い家の子弟も含まれていた。

リッチは、彼らが処刑されれば神父達に対する敵意が一層高まることを懸念し、

また攻撃されても許すというキリスト教的模範を示そうと思い、彼らのために、可能な限り司法官に執り成し、彼らを許すよう頼んだおかげで、彼らは死刑を免れて棒打ち二十で釈放された。

ところが彼らはその後再びリッチを訴えて街から追い出そうとした。これにはリッチも憤慨して、後に「いかにも異教徒らしい忘恩」と書き残した。

挫いた足はその後ずっと完治せず、長い距離を歩くことができなくなった。

こうした事はその後も幾度となくあった。

そのためか、リッチはまだ老境に達しないうちから髪も髭も白くなっていた。

こうした事は外国人に対する敵意のためでもあったが、やがてリッチは、こうした敵意や不信感は外国人に対してだけでなく、中国人

同士でも日常であることに気付いた。

中国では礼儀が非常に大切にされるが、その裏では、本当は誰も信賴せず、他人同士はもとより、友人同士、親戚同士、皇帝と家臣、父と子の間でさえ常に相手に裏切られるのではないかと恐れ、警戒していた。

尊ばれているはずの儒教道徳も、実際は形骸化しているらしい。

この他にリッチが見た中国の悪弊は、星占いや怪しげな不老不死の方法や錬金術の迷信が横行している事、無節操で、金があれば何人でも妻を買える事、生まれてきた望まれない子を殺したり売ったりする事、売春が横行し、さらには男色も当たり前である事、人々が平気で嘘を付くことなどがあった。

偽証が普通に行われるという点では、リッチ達も訴えられたし、後には、このために黄明沙という中国人キリスト教徒が死亡することになった。

そのいきさつは、その頃マカオでは新たに赴任したマカオ司教をめぐってポルトガル人の間で内紛が起こり、またオランダの海賊船のために防壁を築いていた。

これを見た中国側では、マカオが本土に反乱をたくらんでいると言われるようになった。

そんな中、黄明沙は呼ばれてマカオに行く途中で捕まり、彼を捕えた沿岸警備の隊長は、なにか報酬がもらえると期待して、その市の補佐官に黄明沙をマカオのスパイだと訴え、補佐官は黄明沙を拷問して、反乱の計画を自白させようとした。

黄明沙は拷問されても声もたてず耐え、潔白を証したが、告発者の方は、無実の人間を訴えて拷問にかけさせたということに

なれば自分が危ういので、なんとか彼が反乱をたくらんでいるという事を証明するため、黄明沙と同行していた少年を拷問して反乱の計画を自白させ、さらに黄明沙を拷問して自白させようとした。

黄明沙は最後まで自白しなかったが、「水を使つた魔術」を警戒して水も与えられなかったので、拷問を受けた後衰弱して獄中で死んだ。

後に、彼の無実は明らかになり、黄明沙はマカオに葬られた。

リッチは彼の死を悼むあまり、彼は死んだ時キリストと同じ三十三歳だったと思い込んだが、実際は三十八歳だった。

しかしこうした悪弊も、つまりはこの国では長い間聖福音が知られてこなかったからなのだ。

だから中国全体を改宗させればこういった悪弊も消え去り、中国人の魂を救う事ができる・・・リッチはそう信じた。

一方、イエズス会では奴隷を使っていたし、リッチは異端審問所の書物の検閲も良いことだと思っていた。

ある時はマカオから中国本土に逃亡した奴隷を主人の元に送り返したりもした。

リッチはそれを悪いとは思わなかった。

なぜなら中国本土でも彼らは奴隷だったし、なにより「彼らの魂は、これらの異教徒の間で滅びかかっていた」のを助けたのだから。

書物の検閲は、中国の文人達にも高く評価された。

一方、日本の天正少年使節は1585年にローマに着き、教皇グレ

ゴリウス13世に謁見して歓迎を受け、ローマの市民権を送られた。この謁見の時、中浦ジュリアンは高熱を出していて参加できなかった。

しかしどうしても教皇に会いたかった中浦は、後で一人だけ、非公式に教皇に謁見した。

さらに教皇は毎日中浦を見舞い、ローマで最高の医者を探して看病させた。

この事に中浦はいたく感動して、ずっと後でも、この時の事を思い出す度に感動がよみがえったという。

この出来事が、後に中浦の会う苦難のなかで彼を支えていたのかもしれない。

リッチと共に入国した神父達の何人かが病気で死亡した後、リッチにはようやく皇帝に謁見できる希望ができた。

これまで様々な困難があったが、リッチは毎日勉強に努め今や中国語を流暢に話し、読み書きできるようになっていた。

神父達は最初仏教の僧侶の格好をしていたが、中国では仏教僧の地位が低く、人々から尊重されない事に気付いたので、この頃には儒者の服装をしていた。

また神父達は、適応主義に従って中国風の名前を名乗っていた。

この頃ヴァリニヤーノから、中国の宣教での上長に選ばれていたリッチは、名を利瑪竇^{リマトウ}といい、号を西泰^{せいたい}と名乗った。

リッチ達は努力の甲斐あって幾らか良い信者や協力者を得ていたが、中国全体からすればそれはごく少数であった。

皇帝に布教の許可を得ればもっと大きな成果を上げられると思われるので、リッチ達は贈り物を持って北京に赴いた。

しかしこの時には、豊臣秀吉が朝鮮で明軍と戦争していたので、外国人に対する敵意が強く、またリッチを錬金術師だと思った宦官にリッチが錬金術を教えなかったので、謁見できずに、南京に戻った。万暦帝はすでに長い間宮廷に引きこもって外部の者と会わず、人々は宦官を通してしか皇帝と話せなかったもので、当時宦官は大きな権力をもっていた。

リッチは南京で父が死亡したという知らせを受けた。

リッチは数回の莊嚴ミサをあげて父を追悼した。

その後秀吉は禁教令を出し、これ以降日本ではキリスト教が迫害されるようになっていった。

天正少年使節が日本に帰ってきた時には、すでに禁教令下であった。

秀吉が病死して戦争が終わったので、リッチ達は再び北京に赴いた。途中で馬堂という残忍さで知られ誰からも恐れられていた宦官に捕まり、贈り物の多くを没収された。

馬堂が没収した品の中に十字架像があつたが、十字架上のキリストがリアルに作られ、血まで着色され、生きているように見えるものだった。

馬堂は、これを皇帝を呪い殺すための道具だと言い立てた。

リッチ達はそうではないと説明したがなかなか理解してもらえず、監視をつけて監禁された。

このため命も危うかったが、友人の官吏の助言で馬堂の歡心を買うように努めたので、結局馬堂を通して皇帝に謁見した。

といつても皇帝に直接会うことは出来なかったが、贈り物の時計や西洋絵画が功を奏したためか、北京に滞在する許可をもらい、布教も禁止されなかったので、その後も北京や中国各地で布教を続けた。

その後徐光啓という有力な官吏が改宗した。
彼は敬虔な信者だったらしく、その後キリスト教徒のために様々な便宜を図ってくれた。

またリッチは中国語で「四元行論」や「交友論」などの著作を表し、中国人の間で高い名声を得た。

またこの頃にはリッチは中国の古典にも精通し、儒教の四書五経をラテン語に翻訳してイエズス会に送ったりもしていた。

そしてリッチは、以前受けた父の死の知らせが誤報だったことを知った。当時、手紙を書いてもそれが届くまでかなりの時間がかかったし、無事に届く保証も無かった。

それで、彼は父に向けた手紙で父へのいたわりと中国における布教の主な成果を書いた後、最後に書いた。

「この手紙が地上でお父さんに届くのか、あるいは天国で届くのかは分かりません。

とにかく私はお父さんに手紙を書きたかったのです。」

この手紙がマチェラータに届く前に、父は今度は本当に死去した。そしてその訃報がリッチに届けられたが、その訃報が届く前にリッチも世を去ったのである。

リッチは休む間もなく働いていた上に、ひっきりなしに訪れる来客を迎え、中国の習慣に従っていちいち答礼に行っていた。

北京で科挙の試験が行われ、最も来客が多かった年、リッチは答礼訪問から帰ってくると病に倒れた。

リッチは言った。

「今、死んで永遠の報いを受けるべきか、この宣教の仕事を続けるべきか、迷っています。」

「しかし、考えてみると、この中国宣教という事業を進めるためには、私が死んで、天から助けるのが一番いいのだとも思います。」

カトリックでは、天国に行った人が地上にいる人々のために神に執り成しをして助ける事ができるという信仰がある。

リッチはそのまま病氣から回復せず、数日後、寝台に座ったまま眠るように死んだ。

リッチの死の一年前に彼から洗礼を受けた李之藻という知事が彼のために棺を買い、あるキリスト教徒の文人の提案で、皇帝から埋葬地をもらおうという事になった。

そこで李之藻が陳情書を作成し、皇帝はこれを許可し、土地を与えて彼の墓を作らせた。

外国人にこのような厚遇が与えられたのは驚異的なことだった。

とはいえ、万暦帝は最後まで改宗しなかったし、中国のキリスト教はその後もごく少数にとどまった。

後にはある官吏の迫害で宣教師達が追放される事件も起こり、さらに後には禁教令が出された。

一方日本では、秀吉の命令で日本人キリスト教徒と宣教師合わせて26人が処刑されて以来、迫害が激しくなり、大規模な殉教が起こった。

26人の中の日本人は、フィリピン人スパイだと訴えられた。

神父になり地下活動をしていた中浦ジュリアンは、他の7名の宣教師、修道士と共に穴吊りの刑で処刑された。

これは汚物の詰まった穴の上で逆さ吊りにして殺す刑で、頭に血が溜まり、目や耳から血を流しながら数日かけてじわじわと死に至るというもので、棄教すればいつでも逃れることができたので、宣教師の一人は苦痛に耐えきれず棄教したが、他の者は全員最後まで耐えて殉教した。

中浦ジュリアンは最後に

「私は、この目でローマを見た、中浦ジュリアンです。」

と言って息絶えた。

また、パウロ内堀左右衛門という人は、縄で縛られて火山の火口の煮えたぎる熱湯の中に落とされては引き上げられ、全身の皮膚が焼けただれて体液があふれだし、

「至聖なる聖体は、あがめられよかし！」

と叫んで死んだ。死体は火口に投げ捨てられた。

キリスト教徒達を処刑したある死刑執行人は、後にキリスト教に改宗して、自らも処刑されて殉教した。

危険を承知で東北で宣教していたカルバリヨ神父は、信者たちと共に

に厳寒のなか凍った水の中で杭に縛り付けられ凍死した。処刑を見物していた人々は

「転べ（棄教しろ）！ 転べ！」

と罵声を浴びせたが、カルバリヨ神父は信者を励まし、彼ら全員の最後を看取った後自らも殉教した。

ルビノ神父とその一行は、7ヶ月、計105回に及ぶ拷問の末穴吊りの刑で殉教した。

これらは一例に過ぎない。

当時、世界で日本ほど多くの殉教者を出した国は無かった。

こうした迫害に加え、重税の取り立てが加わって天草島原の乱が起こり、そして日本は鎖国に入ってしまった。

東アジアでのカトリック宣教は、南米と違って武力による征服を伴ってはいなかったが、結局リッチが望んだような、国全体の、王道による教化は起こらなかった。

一方、武力で教化された南米は、現在世界最大のカトリック人口を抱えている。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8864n/>

マテオ・リッチと中国と日本

2011年2月7日22時46分発行